

# 山と博物館

第 8 卷 第 9 号

1963年10月25日



新雪の鹿島槍

9月23日 北アルプスに初雪がきた。爺ヶ岳より望む鹿島槍

撮影 平林国男

大町山岳博物館

## 南アルプス

## 北岳の植物

中村 武久



白根御池から北岳を望む

南アルプスの観光会社が毎度宣伝これつとめるかのようではなはだ心苦しいが、相変らずペンを手にする南ア植物札費、くどくどしい駄筆を労する仕末である。

今年も8月初旬、北アルプスの山歩きを終って引続き南ア北岳に足を運んだ。先年来待望のヒラギデンドを是非今年こそは手にしたいと思って出かけたが、そのかいあってついに待望のこのシダをものにしたので、折にふれ北岳の植物を紹介してみたいと思う。

北岳はいうまでもなく南アルプス山岳中の最高峰で3,192mという本邦では富士山に次ぐ第二の高峰であること、それに加えて富士よりもその生成ははるかに古く、地史的な面からもこの山域中にみられる植物はかなり豊富であり、この南ア山系中でもそのフロラは最大であるといつてよい。また南アルプスどころか北アルプスを含めても本邦高山中の植物大豊庫であることは前にも本誌上にのべたが、ちなみにその産する種類を数字で比較してみると、北アの植物豊庫とされている白馬岳では309種(亜高山帯以上のもの——1937年「高山と高山植物」による)、南アのここ北岳では336種(同様亜高山帯以上——1957年横内齊氏による)となっている。もちろんこの場合20年という年代的な相異もあり、その後白馬岳

で新たに目録に加えられたものもいくつかあり、また種類についても両者の数字をそのままのみ込むわけにはいかないが、とも角も北岳は白馬岳に決して劣らぬ植物の大豊庫であることはこの数字だけでみても容易に理解できるものと思う。こん

なところは高山の植物に関心をもつ人々にはよく知られていることで、少なからずそれらの人々の魅力の山の一つとなっていることはいうまでもない。

北ア白馬岳に登れば、白馬岳ならではのまれな珍種稀品はもちろん、特に白馬岳のお花畑の景観はまさに本邦一を誇るに足るものだが、一方北岳でも珍種稀草の点では決して白馬岳に劣るものではない。殊にその数と内容の点ではむしろ白馬岳のそれをはるかにしのぐものであるといつてよい。過去私がこの北岳に登り、実際に見触れた範囲で、これら北岳の植物を以下思うままに紹介する。

## 1. キタダケの名を冠する植物

以前本誌上に寺島虎男氏が「山岳名を冠した植物」を紹介され、その中にもこのキタダケの名を冠する植物のいくつかあげられていたが、私の知る範囲では8種類のキタダケ植物がある。8種類といえは白馬や白山の名をもつものの数に比べ大分少ないのだが、シロウマ植物やハクサン植物と違い、いずれも北岳のみか、あるいはあつてもこの南ア山系のみで邦内に他の産を知られていないことに珍種稀種ばかりである点は、なかなか興味深く思われる。なかでもキタダケソウ、キタダケキンポ

ウゲ、キタダケトリカブトは近接する同山系の山岳でもいまだみられていないもので、はなはだ珍しいものである。このほかキタダケヨモギ、キタダケナズナ(一名ハクホウナズナ)、キタダケカニツリ、キタダケイチゴツナギ、そしてシダではキタダケデンダなどがあげられるが、いずれも稀品に属するもので、北岳山域中のある場所にはかなり量も豊富だが、北岳以外では同じ山系中でも他では極めて稀なものであるようだ。

北岳に登ってこれらキタダケ植物を目にしないのは、ちょうど信濃路に来てソバの味を知らぬも同然、特に前記三種の観察記を上げ参考に供したい。

#### (1)キタダケソウ

##### *Callianthemum insigne* var. *hondoense*

この種が発見されたのは昭和の始め頃、1931~2年で最初は朝鮮冠帽山のウメザキサバノオと同一のものであろうとされていたが、その後中井博士、原博士によって新種であることが認められたものである。またその後大井博士によれば、キタダケソウはウメザキサバノオの変種だということになっている。いずれにせよ邦内では他に知られていない稀品であるのだから、そうした論議は分類学者にまかせるとして、このキタダケソウはどんな植物かという、これによく似ている日本の植物は他にないので、大方図鑑をみておけばすぐにこれと解る。あえていえばハクサンイチゲに似ているようでもあるが、ともかく細かく切れた葉は白っぽく、何枚か地面から叢生するので、葉だけで、容易にこれと解る筈である。残念なことに私はまだその花をみていないが、記録によるとこの花期は6月下旬~7月上旬とか、であるから花をみようとするには春の北岳に登らねばみられないことに

なる。しかしいずれにせよこの植物は花をみなくても、その細かな緑白の葉を目にするだけで充分満足できるかと思う。

これの北岳での産地は主として山頂から南に伸びる稜線の東側で、多少岩礫があってもやや湿り気のある草原中に点在する。

#### (2)キタダケキンボウゲ *Ranunculus kitadakensis*

キンボウゲの極く小型なもので、これに近縁なヤツガタケキンボウゲ(八ヶ岳産)クモマキンボウゲ(白馬岳産)などとの区別はむずかしい。しかし一応北岳のものはキタダケキンボウゲとなっているのだから、特に専門的なその識別点を知らなくても、北岳に登り山頂稜線附近の岩かげや草原中に背の低い、せいぜい12~13cmのキンボウゲをみたらこれと思つてほぼ間違いない。この花の時期はだいたい7~8月だから、夏の北岳で充分みられる。黄色の小さな花は、人の目を特に引きつける程ではないが、なかなかかわいい花である。

#### (3)キタダケトリカブト *Aconitum kitadakense*

トリカブト類は北ア、南アを問わず、各地の山にいろいろな種類が知られ、またそれらの多くはその土地の特産種として記録されているようだ。例えば白馬岳のハクバブシ、妙義山のミョウギトリカブト、また北海道大雪山のダイセツトリカブト等々その数はかなり多い、同時にまたこれ等種類の識別はなかなか容易でなく、我々如き不勉強な者にはとても解るものでない。しかしこの北岳特産のキタダケトリカブトは、この類のうちでも比較的はっきりしているもので、丈が非常に低くせいぜい20cm内外、葉が細かく切れ、その裂片が非常に狭いことなどからたいていこれと判断がつく北岳にはもちろんこれ



ヒラギデンタ

の外ソバトリカブトなどもみられるが、一般にそれ等の種類より分布が高所にあり、最も多いのは山頂から南にのびる稜線の八本園方面への下り口、この辺りに広がる草原中にかなり多く、殊に7月下旬~8月上旬にはこの辺り見事な濃青紫色の花でかざられる。

#### 2. 北岳の珍草ヒラギンダ

上記のキタダケ植物はいまでも





キタダケトリカブト

なく、北岳にはこの他タカネマンテマ、ハハコヨモギ、ハクロバイ、タカネビランヂ、また比較的量の多い点で興味をもたれるシロウマオオギ、タテヤマキンバイ、ウラジロキンバイ、ムカゴユキノシタ等々おおいに注目に値する種類がかなり豊富だ。殊にシダ植物に至っては本邦随一の高山シダの豊庫である。先きのキタダケデンダはもちろんのこと、タカネシダ、トガクシデンダ、ヤツガタケシノブ、ナヨシダ、イワウサギシダ、ヒメハナワラビ、アオチヤセンシダ、ヒモカズラ、ミヤマヒカゲノカズラ、タカネスギカズラ等々に加え、本邦唯一の産として知られているヒラギデンダ（一名クモイカグマ）は北岳の植物について触れる場合必ず上げねばならない珍品である。

このヒラギデンダは古く樺太に知られ、本邦では1936年石塚末吉氏がここ北岳で採集したのが最初であり、その後余り多くの人々がこれを得ていないようである、私の知る限りでは最近の採集は植松春雄氏、小島俊郎氏くらいでおそらく他に採集した人はいないのではないかと思う。

ともかく私が南アルプスに行き始めて数年、北岳に登るときは必ずこれが一つの目当てでもあった。前回も大町山博の同僚高橋学芸員も一諸の折、2日ばかりで山頂一帯をくまなく探したがつい出はこなかった。ところが今年8月、

いままで歩いていない広河原からのコースを登り、白根御池にベースを置き、大樺沢～パトレス方面を調査した際、まさに幸運、我が意天にも通じたのか、長年待望の本種にお目にかかることができたのである。

それも貧弱な株ではない、実に立派な株で根茎の太さは経4cmを越え、葉の長さも20cmを越えるものだ、このときばかりは足下の危険も忘れ手はなしで狂喜した程だ

それまでは高い所に在るものとはばかり思いこんでいたのが、決してそんなに山頂ではない、標高2,600~700北岳では決して高い所ではないのである。岩かげの多少

腐植土がたまっているような地面くだけた岩の間にヒイラギに似たトゲトゲしい硬い葉を平開している、みるからに珍草稀品である。

若い葉は多少黄色味を帯び柔みがあるが、古い葉は触れると痛い程だ。そんな様子を見るとこのシダは高山寒地のものでありながら、冬枯れせず雪の下でも元気に冬を越すものらしい。極めて稀にしかみることのできない植物だけにその生態に今後おおいに興味をもたれるが、それだけにこの珍草何とか未長く保護したいものである

(山博学芸員・農大第一高校教諭)

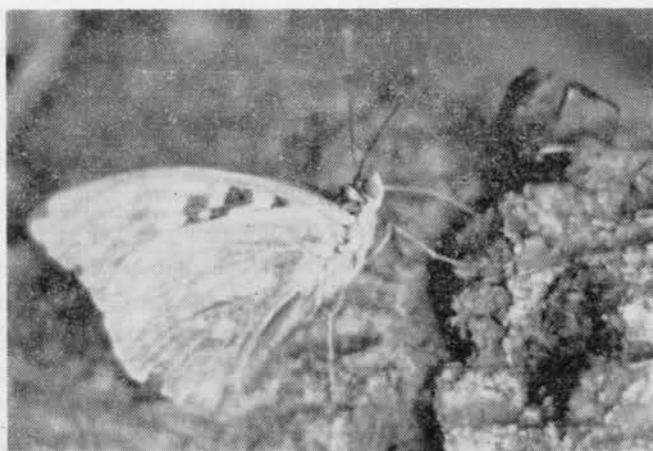


長年の願望かなって

## 南アルプスの動物

## 2 蝶 類

## 三 石 紘



オオムラサキ

最近では、ほとんどの中学や高校で、集団登山を行うようである。夏山のシーズンに、西駒ヶ岳や燕岳や仙丈岳などのホビユラーなルートを歩いた人なら、一度はこれら集団登山の行列に遭遇する悲劇?を経験しているだろう。百人も五百人も長い行列がゾロゾロ登って来るのをジリジリしながら待っているのはまだ我慢出来るが、彼等がロ々に「コンチワ」「コンチワ」と叫ぶのには閉口する。こんな連中にいちいち答えては、のどをつぶしてしまう。とにかくただでさえ水に餓えている時なのだから……

かくいう私の山登りも、集団登山で行った八ヶ岳にはじまる。フウフウいいながら硫黄岳にたどりつき、そこで話に聞いたお花畑におめにかかった。名前などわからぬ色とりどりの花が咲きみだれ、おまけにベニヒカゲやヒメヒオドシが花から花へ飛び廻っている。そしてガスの切れ間には横岳や赤岳の稜線が時々姿を現わす。この雄大な環境を自由に飛び廻る高山蝶の美しさは、私の図鑑や写真からの想像をはるかに上廻るものであった。私はすっかり感激し、それから山へ登るようになった。だから私には集団登山の悪口など云う資格はない。

交通事情のあまり良くない南アルプスの山旅は、当然長いアプローチを重いザックに苦しみながら歩かなければならぬ場合が多い。それだけにまた蝶類に接する機会も多い訳である。山麓のニッコウキスゲやマツムシソウの群落上を飛びかうヒョウモン類、タテハ類、うっ蒼としたシラビソの原生林中をゆうゆう舞うアサギマダラ、稜線の岩上に静止するクジャクチョウ……これらの山の妖精たちに逢うにつけ、私は硫黄岳での感激がよみがえる。そして彼女たちの可憐なふるまいが、どのくらい山

旅の疲れをいやしてくれるかしのれない。

## 高山蝶

いわゆる高山蝶とよばれるものうち、南アルプスに分布が確認されているものは、丹下仁氏の「上伊那の蝶」(上伊那誌・自然編1962年)によると8種類ある。次に記してみる。

- a ミヤマモンキチョウ……赤石山脈の仙丈岳
- b クモマツマキチョウ……赤石山系で特に笠山、小黒川溪谷。
- c ベニヒカゲ……各地、仙丈岳では8月初め
- d クモマベニヒカゲ……前種よりさらに高山性で笠山には産せず、仙丈岳。
- e ヒメヒオドシ……7月中旬笠山、仙丈岳

f オオイチモンジ……長谷村産の記録があるのみできわめてすくない。

g コヒョウモン……7月頃山地に出現するが少ない。

h ミヤマシロチョウ

この8種類のうち、ミヤマモンキチョウ、ミヤマシロチョウ、ベニヒカゲ、ヒメヒオドシなどを私も笠山、鋸岳、駒ヶ岳、仙丈岳、白根三山、鳳凰三山、三峰川の上流、塩見山麓などの各地で確認している。

クモマツマキチョウは、以前戸隠山の不動沢でをみかけ、その可憐な姿にひかれ、南アルプスでも是非逢いたいものだと思って注意しているがいまだにそのチャンスはない。この蝶は天然記念物に仮指定されたほどだから、個体数が少ないのだろう。それに較べ、ベニヒカゲクモマベニヒカゲの多いのには驚く。仙丈の馬の背や馬鹿尾根のお花畑のマルバダケブキやグンナイフウの草の中で昼寝でもしていれば、キスの雨が降ってくるほどだ。以前浅間山の湯の平で、あまりベニヒカゲがたくさんいたので捕虫網を二、三度振り廻したら数十頭入ったという経験があるが、南アルプスでそんなことをしたら大変だ。捕虫網が破れるおそがある。

さてベニヒカゲとクモマベニヒカゲの区別はなかなかややこしい。この両種は混棲している場合が多いのでなおさらだ。私は後翅の裏面の斑紋で区別することにしてはいるが、たいてい山を歩いているときは、ザックが重かったり、登りがきつかったりしてグロッキー気味の場合がほとんどで、いちいち蝶をつかまえて、この判別法をこころみる余裕などあるはずがない。そこで雲に近い土地にいるのは全部クモマベニヒカゲ、それ以下ではベニヒカゲという簡易判別法をつかっている。これは一見非科学的だが、クモマベニヒカゲが2000m以上の標高で

いと棲息しないという説もあるのだから、時にはあたる場合もある。

#### 甲斐駒のタカネヒカゲ

北海道大雪山特産のウスバキチョウ・アサヒヒョウモンは論外としても、北アルプスや八ヶ岳に産するタカネヒカゲとタカネキマダラセセリが、円下氏の蝶目録にはない。けれども横山光夫氏の原色日本蝶類図鑑(保育社)には、前種は仙丈岳、後種は野呂川上流に見出されるとある。私も甲斐駒ヶ岳でタカネヒカゲを目撃しているので、個体数は僅かかもしれないが、とにかく分布することは確かだろう。

昨年夏のことだ。暴風雨のはげしい甲斐駒の山腹を私は歩いてきたのだが、横なぐりに吹きつける強い風とズルズル滑る花崗岩の砂のため、はうようとして登っていった。ふと見ると岩の陰にタカネヒカゲが強い風と雨をさけて静止している。しかし、それを見た時、私はただ「はあ…タカネヒカゲがいるわい」と思っただけで採集しようなどとは考えなかった。蝶など捕まえるより自分が吹飛ばされないようにすることで精一ぱいだったのだ。またタカネヒカゲは白馬岳や後立山では、比較的多く見かけているので、まさかこの種が南アルプスの珍稀種で採集しておけば、貴重な資料になるなどとは夢にも思わなかった。今になってみると実に残念である。

#### 入笠山・小黒川溪谷のヒメヒオドシ

南アルプスの北端に位置する入笠山は、最近ではハイキングやキャンプの好適地としてクローズアップされているが、蝶類採集地としても著名である。春になると蝶のうちでもヒメギフチョウ、クモツマキチョウなどの特級品を産するので、これをねらう採集者の数もまたおびただしい。蝶の数におとらぬほどである。彼等は高原の美しい風景になど目もくれず、ゴソゴソとヤブの中に入って行く。もちろんヒメギフチョウの卵や幼虫を採集するためだ。彼等はウスバサイシンの葉を、おもむろに一枚一枚めくっていく。そのため、入笠山に生育するウスバサイシンの葉の大部分は、手あかでピカピカ光っているのではないかと思うほどだ。

さてヒメギフ騒動が一段落して夏になると、ミヤマシロチョウ、ウラジヤノメ、ヒメヒオドシや、ヒョウモン類、タテハ類が元気に飛び廻る。そして8月下旬から、ベニヒカゲ(これは本当のベニヒカゲ)がおびただしく発生する。

入笠山に続く釜無山、鋸山の南側に沿って小黒川が流れている。この川は戸台部落で戸台川と合流し、黒川となる訳だが、上流の小黒川溪谷には、毎年群生するイラクサにヒメヒオドシが大量発生する。この頃、戸台行のバスに乗ると、仙丈岳へむかう登山者と同数位のムシヤが乗っている。捕虫網、胴乱、採集管などで完全武装した彼等の多くは、これからはじまるヒメヒオドシの幼虫

争奪戦のため殺気立っている。

入笠山や小黒川溪谷以外にも、蝶類の豊富な土地は、南ア山麓の水峰川沿いに行くつかある。鹿嶺高原、芳ノ平、田代ガ原、浦の原、小瀬戸峡などがそれである。これらの地に行くと、オオムラサキ、スミナガシ、クジャクチョウ、ヒオドシチョウ、テングチョウなど普通では見ることの少ない種類がワンサと飛び交うのを見られる。しかしこんな蝶では採集家は殺気立たないと見え、おとずれる人は少ない。ときたま地元の学校がキャンプや遠足に行くくらいである。

#### 小瀬戸峡のオオムラサキ

7月のある晴れた日曜日、私は隣りのA先生夫妻と小瀬戸峡にハイキングをこころみだ。なんて書くときこえはよいが、実はいやいやながらキャンプの下見に行った訳だ。ところが、杉島部落をすぎるあたりから、雨あがりの道路に蝶が多く、すっかりうれしくなってしまった水たまりにはクジャクチョウ、テングチョウが群がり、歩いていくさきさきで、一斉に飛上った。路辺のコンクリートの石垣にはヒオドシチョウ、キベリタテハ、ルリタテハなどが、わき出る水をすっている。特にオオムラサキの多いのには驚かされた。一度などは、切り株に7頭も群がっていたほどだ。この種は日本の国蝶として切手にまでなっているのだが、こんなに多くては、かえって有難味が薄れるというものだ。

その時の野帳をみるとタテハチョウ科だけでも、オオムラサキ、コムラサキ、ルリタテハ、エルタテハ、ヒオドシチョウ、ミドリヒョウモン、ウラギンヒョウモン、クジャクチョウ、コヒョウモンモドキ、サカハチチョウ、ユミスジ、アサマイチモンジ、キベリタテハなど14種が記録されている。

意外な蝶の歓迎で有頂天になったのは私だけではないA先生の奥さんなどは、感激のあまり、帰宅してはじめて靴づれの痛さを気付いた程である。そして奥さんは、全国の奥様方にもこの感激を……と考えたのかどうか知らぬが、朝日新聞に「オオムラサキ」と題する一文を発表した。すると次の日から、A先生宅に全国の読者から手紙が殺到するではないか。「是非小瀬戸峡へ行きたい」とか「子供の昆虫採集の宿題で困っている。蝶を送ってくれ」中には「文中の若い先生と文通したい」というのまであったそうだ。そして反響は手紙だけではすまなかった。数組の熱心な読者がA先生宅を訪れたのだ。中には東京から親子4人で来て、3日も泊っていった。子供らは捕虫網をふりまわし、大人は一日中昼寝ばかりしていた。これにはA先生夫婦も悲鳴をあげてしまった。

さて私も蝶について書いたのだが、この文が蝶採集を切手の収集と同様に考えているようなコレクション、マニアの参考にならなければよいが……。

(伊那里小学校教諭)

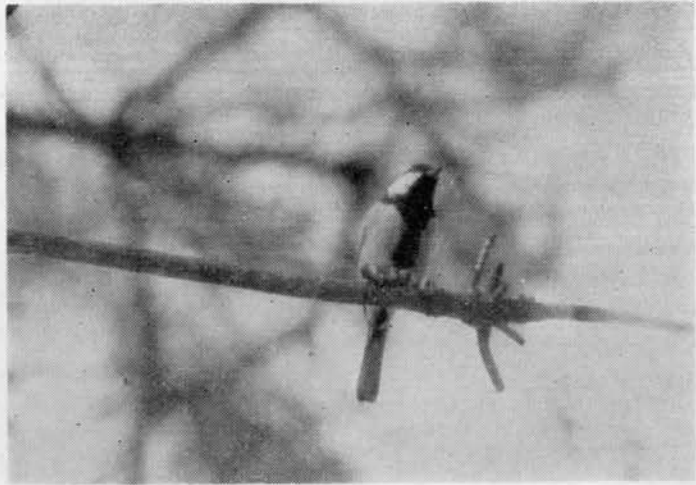


## シジウカラ

長沢 修介

山々が新雪を頂き、木々の葉が一段と黄味や赤味を増した此頃、林の中に入ってみると、下草は半分も枯れ、風もないのに、はらはらと黄や赤に染った葉が落ちる。夏はクログミの大声な嘯りゃ、オオルリの朗々たる鳴き声が聞かれ、ウグイスの声も間近かにたえまなく聞えたのに、秋のこの林は何もない。ただ、たまに落ちる紅葉の音が、静けさを破ってカサツと音をするのみの静けさだ。もうすっかり夏鳥が去ってしまったこの林の中には少数のカラ類の仲間のみになってしまった。そのカラ類もわずかいるかないかわからないような小声でお互の存在を確かめ合っていて、何か危険がせまった時か、大きい動きをする時でもない限り大声を出さない。先程以来ずっと向うの方で小さな声で鳴いていたカラ類の一団がこちらによって来た。

このカラ類の群は大体シジウカラ、ヒガラ、キクイタダキで編成され、その先導役は一番大きいシジウカラが受持っている。そして、シジウカラは低い枝や地上で主にエサをあさり、ヒガラは木木の中枝位の所を主に渡り歩いてエサを探しているようだ。だからこの一群の生活範囲があり、それを円形にするならばその円の一番外側迄活動範囲を広めているものはシジウカラであり、中間



の円にヒガラが一番円の中心に近い小さな円の中で生活しているのがキクイタダキということになる。私の前の木に来たシジウカラが、一匹のケムシを見つけ、くわえてパツと手頃な枝に打ちつけ、動かなくなってから今度は両足で押えつけ、しごいたり、くちばしでつついたりしている。やがて少しずつちぎって食べてしまった。

アサヒペンタSV タクマー500% 200/1, 5  
フジSS

## 文化財を世にだそう

大町市は三方山にかこまれた地理的条件をもち、古い時代に栄えた文化的遺産が比較的よく保存されている。特に鎌倉、室町時代の国宝仁科神明宮、重文若一王子神社、全盛運寺の古刹や、棟札、鉄製鰐口、懸仏など著名である。だが著名の割にそれほど知られていない。

奈良京都の古寺や、近くは松本城、善光寺など知らない人などない位なのに神明造りで名高い仁科神明宮が国宝だと聞いて驚く人が多い。これも地区住民の理解もさることながらそれぞれの関係者のPRのまずさや当局の力の入れかたの不足と反省している。

この間も日本アルプス観光連盟(松本市・大町市などでつくっている観光団体)の写真をみると松本城などの関係した写真は非常に多いが、大町市内の文化財を撮ったものが一枚もないのに気づき、事務所である松本市の観光課にもんくを云っておいたが全く残念なことだ。

自然ブームと黒四ダムの開放で明年あたり大町市を訪れる観光客も多くなると思うが、金や手間、ひまでは償うことの出来ない、500年 1000年前の貴重な文化財をもっと掘り起し整備してその人達に見せてやることも大事ではないか。一度見てすぐにあきってしまう観光対象物より、人の心をとらえてはなさないこれらの文化財の方がある面では観光的にも重要だと思ふのだが。

山岳博物館ではこんど縄文文化から明治の初期にかけての歴史を掘りおこし、遠い祖先の生活や気質を偲んでいただこうと、「安曇の歴史展」を文化の日の記念行事としてとりあげたが、こんな機会に郷土の優れた文化財に直接ふれることも意義あること

国宝仁科神明宮では宝蔵庫、重文若一王子神社、盛運寺はことしから来年にかけて解体修理や、造営を行ないその保存と、公開につくすと云うのが本当に結構なことだと思ふ。この機会に優れた郷土の文化財を世に出すために市民ひとしく心がけようではないか。(藤 巻)

## 博物館だより

御寄附ありがとうございました

現金

大阪市 伊藤東海 現金1000円 施設費として 大町営  
 林署 西尾弥太郎 現金2000円施設費の1部に  
 中原町 阿部西与 現金1000円 施設費として  
 六日町 下島栄司 現金3000円 研究費として  
 中電大町 松山千春 現金1000円 施設費として  
 下一 戸沢勲 アナグマ生体 1体  
 大町 荒井常男、タシギ 1体  
 海の口 平林全立 ツミ生体♂1体  
 源波 太田富芳 タヌキ生体1体  
 犬の窪 太田治 タヌキ生体1体  
 大黒町 田中幸夫 ガチョウ♀2体

美麻村 柳沢政重 ノウサギ生体2体

穂高中 小野貞雄、太田正保 飯島重男 アカエリカイ  
 ツブリ♀2体

大黒町 松本公貴 アカエリカイツブリ1体

仁科町 内山慎三 クロツグミ♀生体2体

## 文化祭

大町市恒例の文化祭は、11月3日の文化の日を中心に  
 行なわれる。

本館では11月2日より13日まで「安曇の歴史展」を計  
 画している。

これは大町市の生いたちを古代より現代まで系統的に  
 展示するものでその資料点数は1000点余にわたる。

入場は大入20円 小人10円 で団体には割引もある。

## 「北アルプス夜話」 大雪溪に咲くオオサクラ草

今からざっと 850年前の堀河天皇の御代、白馬盆地は京都の六条院の荘園であり、皇室関係の御領として、こんな山奥へも都からたまにはお役人が来たものでした。神城の盆地は耕すに易く、水清くして流れ急ならず、麻の出来もよいのので早くから村が開け、四人の庄屋を中心に何不自由なく平和に暮していました。その南端の佐野村には年の頃十八、こんな片いなかに珍らしい美人がありました。娘は庄屋の一人娘、それこそ目の中に入れても痛くない程の庄屋夫婦の可愛がりようです。

或る年のこと長い冬ごもりから解放された五月の空の下、娘は下女を添って西の山へワラビ採りに出掛けました。山は若葉の匂でむせかえるようです。オニツツジが真赤に咲いて、ホトトギスの鳴声が二人を一層はしゃがせる。夕暮れせまる頃娘達は我が家へと帰りの足を運ばせると、どこからか美しい笛の音が聞えてくるのではない、二人は足を止めた。妙なる音は立止っている娘に近づき、眼の前にいなかでは見たこともない、いつか子供の頃遠く都から来たという立派な人の服装に似た、優雅で貴公子然とした若者が立っていた。

若者は驚く娘に物静かな口調で言った。

「私は旅の者、話を聞くにこの村に立派な庄屋様がおるとのこと、一夜逢って話したいことがあるがお主達は見る所此の村の者、私を案内してくれぬか」と。娘は考えた、これはきつと立派なお方に違いない、「あい、庄屋とはおらが家でございます、」と早速連れて帰って父親に話し、情深い庄屋は快く宿を借すことにした。その夜はこの貴公子の都の話が中心で、家中大賑いだった。とりわけ娘はまだ見ぬ都の空へ身は半分行っているような心持ちで、すっかりたんのうし、都への憧れは若者への憧れと化し、一夜の約束がつい二晩三晩と伸びて行った

今は二人は人目をしのぶ仲となり、娘はどうしても都会の生活がしたかった。ある朝暗い中に起きた二人は、ついにあれ程反対する親達に知れぬよう、都へとこっそり村を後にした。佐野坂につくとさすがに娘は、これが見おさめかと我が家の方四ヶ庄屋を見下したのですが、その時です、異様な黒雲が白馬岳の方から飛んで来、四囲は真暗になり地鳴りが響き亘りました。娘はあまりの恐ろしさに若者にとりすがろうとすると、これはどうしたことか、今までそこにいた貴公子の姿は無く、見るも恐ろしい悪魔が立っているではないか。悪魔は鋭い爪で娘を驚しつかみ、からからと笑った。「俺の正体が解ったか、俺こそは白馬岳に棲む赤婆大王であるぞ。」というが早いか魔物は黒雲と共に娘をさらって白馬岳に飛び去った。

娘はこうして悪魔に喰い殺されその生血は大雪溪から白馬槍にかけて点々と赤く続いていた。それから幾年か経て、こゝに可憐な高山植物が咲いた。その花卉は血色オオサクラ草(又の名をミヤマサクラ草)がそれである。今はこんな昔話しもよそに、毎年幾万かの人々が山を訪れ、そして幾組かが遭難しているが、そんな話の度に何時もこの伝説を思い出すのです。(長沢 武)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料30  
 0円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、  
 郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご  
 送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第8巻第9号 1963年10月25日発行  
 発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
 大町山岳博物館  
 印刷所 大町市上仲町  
 信州印刷大町工場